

優秀賞

聖火に灯した感謝の気持ち

岩出第二中学校 三年 久保 瑚都

二〇二一年四月九日、私はこの日、一生忘れることのない思い出を作りました。私は聖火ランナーとなり、自分の生まれ育った和歌山県を走ることができたのです。

二年前の夏、聖火ランナーを一般市民から募集していることを知りました。走ってみたいと思いましたが、走りた人も頑張っている人もたくさんいるからやっぱり無理かな、とも思いました。母に相談すると、「走れるかどうかはやってみないと分からない。けれど、やらないと絶対に走れないよ。チャレンジしてみたら？」と言ってくれました。

選考内容は四百字程度で自分の頑張っていることや思いを書くというものでした。私は大好きで続けている陸上の県大会で優勝したことを書きました。

一週間後、一時予選通過の知らせが姉のスマホに入りました。私も母もすごく喜びましたが、まだ二次選考がありました。私には陸上以外に自信を持って書けることがありません。その後の近畿大会も予選で負けていたので、何を書けばいいのか行き詰ってしまいました。母が、「負けたことを書いたらどう？」と言ったのです。初めは言っている意味がよく分かりませんでした。なんでわざわざ負けたことを書くのか。そんなことを書いて選んでもらえるのか。負けたことを思い出したくないし嫌でした。恥ずかしいとも思いましたが他に書くことの思い浮かばなかった私は、仕方なくそのことを書き始めました。けれど書いていくうちに、私の考えは変わっていきました。勝つことはうれしくてすごいことだけれど、負けることで得たものも大きいことに気づきました。悔しさはもちろん、「また一緒に頑張ろう。」と言ってくれる家族や仲間がいる心強さや、全力でやりたいことをやらせてもらえる幸せ。自分の力だけではどうしようもないことでも、みんなの力を借りることのできたことがたくさんあることに気づき、自分が今思っている正直な気持ちを書くことができました。これで駄目なら、

もういいと思える文章になりました。

その冬、ついに私は聖火ランナーに選ばれたのです。選ばれたことはもちろんですが、私が一番伝えたかった思いが読んでくれた人に届いたことがすごくうれしかったのを今でも覚えています。

その後コロナが流行し、聖火は一年延期となりました。そして一年後、コロナは終息することなく、私は走る日を迎えました。なんとなく世間には、走ることを全力で喜べない雰囲気もありました。けれど、家族みんなが自分を信じて堂々と走っていい、走っておいでと背中を押してくれました。

私はトーチを持ってスタート位置に立ちました。聖火をもらい、走りだしました。たった数分間の出来事です。けれど私にとっては夢のような数分間でした。周りのすべての人が拍手と笑顔で応援してくれました。聖火を持った手は初め震えていましたが、その震えがいつ止まったのかも覚えていません。自分なのに自分ではないような今まで味わったことのないふわふわとした心地よい感覚でした。母と姉が手作りの横断幕を持って応援してくれていました。そこには、「走れる幸せに感謝。支えてくれるみんなに感謝。がんばれ！瑚都 一生の思い出をありがとう。」と書かれていました。その文字を見て、胸がいっぱいになりました。走り終わって真っ先に頭に浮かんだのは、支えてくれたみんなの顔です。私は自分の力だけで走ったのではなく、みんなの代表として走らせてもらったのだと思いました。ここまで来られたことに感謝の気持ちでいっぱいでした。

私はこれからも感謝の気持ちを忘れず、色々なことに全力で取り組んでいこうと思います。そして今度は、自分が家族や仲間を支えていくことができる強くて優しい人間になりたいと思いました。